

## 障がい者の私にできること

岐阜県立岐阜聾学校 中学部3年 河合 茉奈

私は、生まれつき聴覚に障がいを持っています。大きい音は聞こえますが、声が濁って聞こえてしまうため、男の人の声と、女の人の声の区別もつきにくかったり、突然音がしても何の音か分からなかったり、うしろから話されると、聞きとれないということが多いです。

私は、小学校まで普通学校に通っていました。友達とは手話などを使わず、読話（話し手の唇の動きや顔の表情から話の内容を読み取ること。）でコミュニケーションをとっていました。そのため、何を言われているか分からないことも多く、聞き返せなかった私は、分かったふりをしてしまいました。その結果、トラブルになってしまうことがよくありました。その時の私は、この学校に聞こえない人が一人しかいなかったのだから、自分が聞こえないことを認めることが出来なかったのだと思います。だから、聞こえる人と同じようにしたかったのだと思います。しかし、そんなことを続けていても、いい方向には行きませんでした。だんだん自分に自信が持てなくなってしまうのです。だんだん、そんな自分が嫌になり、自分を変えたいと思い、中学校から聾学校に行くことを決めました。聾学校に入って、まず私が衝撃を受けたことは、みんな自分の思いを伝えようとする気持ちが強く、そのために、手話が分からない健聴者に対して身ぶり手ぶりで伝えたり、それが伝わらないと分かると、筆談で伝えていたことでした。また、何気ない会話でも積極的に話しかけ、健聴者の方も理解してくれようと努力している姿を見たときは、とても感動しました。以前の私は、健聴者とは用事があるときしか、関わろうとしなかったのです。それどころか、関わることをさえ避けていました。私は聾学校の人たちを見たとき、健聴者に差別してほしいと思っていなかったけれど、実は、私のほうが、障がいを持っている自分と向きあっていたいなかったことに気づかされたのです。それからの私は、こんなことではダメだと思い、少しずつ自分を変えるように努力してきました。

ある日、私は電車の切符を買おうと思い、窓口に向かいました。駅員さんとの会話が分からず、恥ずかしかったけれど「聞こえないので筆談してください」とお願いしました。すると、駅員さんはニコッと笑って、すぐメモ帳とボールペンを取りだし、筆談してくれました。そのとき、私は勇気を出して言って、よかったと思いました。今までの私なら、その一言が言えず、切符を買うことができなかったでしょう。こういった経験をたくさんしていく中で、私は少しずつだけど、変わってゆくことが出来ました。そして障がいを隠してゆくこと

は何も得られないということが分かりました。それよりも、包み隠さずに、ありのままの自分を知ってもらったほうが生活していきやすいのではないかと思いました。また、手をさしのべてもらうのを待つばかりでなく、自分からお願いすることも大切だと思います。そうすれば、優しく手をさしのべてくださる人がたくさんいるのです。

私は今、聞こえないから嫌だとか、恥ずかしいとかは思わなくなってきました。そのままの自分でもいいと、前向きに考えられるようになり、自分が好きになりました。聞こえないことは不便だと思うこともたくさんあるけど、聞こえないことを他で補うことが出来ることもあるし、出来ないときは仕方がないこれが私なんだと吹っ切ることも出来るようになりました。

また、障がい者だからといって、誰かを助けられないというわけではないということも経験しました。この前、電車を降りようとしたときに、電車とホームまでに段差が少しあり、赤ちゃんをのせたベビーカーがなかなか降ろせなくて困っている女の人を見かけました。私がベビーカーの前の手すりを持ち、おろしたら、その女の方はニコリと笑い、「ありがとうございます」と言ってくれました。その言葉を聞いて、私はとてもうれしい気持ちになりました。いつも助けられている、と思っていた私でも、他の人を助けることができるんだと感じました。

私の理想は、障がいがある、ないにかかわらず、すべての人が支え合いながら生きていく社会です。障がい者だからといって助けてもらうばかりでなく、障がい者の方も出来る範囲で人を助けられるようになれば…と思います。それが互いに支えあうということだと思います。そして私は、これから健聴者の方に聞こえない人のことをもっと理解してもらうために色々なところに参加して、聞こえないとはどういうことかを伝え、難聴者と健聴者の架け橋になるよう、努力したいです。

誰もが住みやすい社会になるために…。